

融合文化と道德教育について
～人類の進化に貢献するための方途として～
About Fusion of Cultures and Education of Morality

市川 恵幸
ICHIKAWA Yoshiyuki

It is supposed an important thing for the evolution of humans is to improve our morality. That is based on the creation of communication and “Fusion of cultures”. The fusion of cultures is to construct a new culture from two or more different cultures. But the fusion of cultures is still not enough to explain what is effective for the evolution of humans. So for its construction, there are three points. First of all, whether it becomes a factor to improve our morality. Secondly, whether it has new power in itself. Thirdly, whether it has harmony and fusion.

1. はじめに

「融合文化論」がさらなる飛躍を遂げるための方策を考えてみたい。この融合文化論の重要性は言うまでもない。しかし、その認知度については必ずしも高いとは言えない。その要因として、「融合文化論」が登場してからまだ年数はそれほど経っていないということのほかに、理論面においてまだ確立されていない、あるいは不十分さを指摘することができるからである。

「融合文化論」の理論を支える学会誌『融合文化研究』¹がある。そこには、さまざまな融合文化に対する取り組みが掲載されており、融合文化の一端を窺い知ることができる。もちろん、「融合文化とはどのような理論なのか」と改めて問われたとき、確かに思想や理念の面からは、例えば国際融合文化学会の設立の趣旨や「はじめに」と題された入会案内に書かれた上田邦義会長の言葉を引用しつつ答えることは可能である。

しかし、その理論的側面からは答えることは難しい。これは「世界文化」の創造という壮大な理念や無限の可能性を持つ「融合文化」の特徴が、一方では漠とした印象を与えかねず、「論」としてはそれが弱点であるというパラドックスを孕むことになっているからである。だからこそ（もちろん、これが従前の学問領域とは一線を画すものであることは承知の上での発言なのだが）この融合文化論に理論的支柱を与える必要があるのだし、そうすることで融合文化論の適応範囲が明確になり、世界を相手に発信していくものとするところができるのである。その結果、この論が「世界平和」のためにますます貢献していくことになり、設立の趣旨を全うすることとなるのである。

ところで、人間が他の動物たちと一線を画しているのは「道德性」である。この「道德性」に着目し、その向上に重点を置くことは「人類の進化」そして「世界平和」に貢献していくための重要なキーワードとなることだろう。

そこで本稿では「人類の進化」や「世界平和」のために「道德性」を向上させることの手だてを考えること、そしてその一つの有効な手だてとして考えられる「融合文化」についての有効性やその認定基準を考察していく。さらにこれらの考察を通して「融合文化論」がさらなる飛躍を遂げるための可能性を考えていくことにする。

2. 人類の進化と道德性

『ケータイを持ったサル』という正高信男の新書が一時期話題を呼んだ。ここで言う「ケータイ」というのは「携帯電話」のことを指す。「サル」というのは、外見上は人間でありながら、その行動形態は動物の「サル」と同じである、ということの意味する。

この著書が話題を呼んだのは、サブタイトルにもあるように『『人間らしさ』の崩壊』が多くの読み手の共感と関心を呼んだからだろう。正高は「はじめに」のところで次のように述べている。

.....現代日本人は年を追って、人間らしさを捨てサル化しつつある。もっとも、人間の「人間らしさ」の遺伝的資質が変容しているわけではない。ただ、人間というのは、放っておいても「人間らしく」発達を遂げるのではなく、生来の資質に加えて、社会文化的になかば涙ぐましい努力を経て「人間らしく」なっていく、サルの一ชนิดなのである。²

人間が人間であることの証。それが危機的な状況にあるというのである。つまり、動物への退化、言い換えれば、人間としての進化を放棄してしまっているということである。「社会的になかば涙ぐましい努力を経て」とあるが、この「努力」の要素として大切なこと、人間として進化していくための最大の要素として「道徳性」を第一に挙げたい。私たちは、知的のみならず、何よりもまずその道徳性を高めることに重きをおくべきなのである。ヌイは次のように語る。

生き残っていくことになるのは、もっとも強く、もっとも活発で、肉体的にもっとも適応している生物ではなく、道徳的に最良の、そして最高の進化をとげた生物なのだ。この新たな卓越性は、人間が自分の道を自由に選択したとき、はじめてあらわれる。(中略)良心を与えられ、独立を手に入れた人間は、野獣に逆戻りしようとする苦痛に耐えながら、自分がその独立にふさわしい存在であることを示さなければならない。³

では、具体的にはどのような方策が考えられるのだろうか。

筆者の場合、筆者の職業(学校教育)とあわせて考えるならば「道徳教育」ということになるだろう。この道徳教育というのは、年間35回行われる「道徳の時間」はもとより、教育課程全体を通じておこなわれるべきものである

学校教育における道徳教育の目標は次のとおりである。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。⁴

「進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成」というこの道徳教育の目標に則り、私たちは未来を担う子供たちに道徳教育を行っていくのである。ヌイは道徳教育について次のように述べる。

人間の知的教養は、その全体が、揺るぎない道徳教育という鉄筋コンクリートの土台の上に築かれるべきである。⁵

「学校」という場は、ある程度社会から隔離された場であるのと同時に、社会の縮図となっている場もある。つまり隔離された場であるからこそ、そして社会の縮図となっている場であるからこそ、意図的であるにかかわらず、たくましく生きていくために必要なあらゆる状況を疑似体験させることが可能なのである。

もちろん、学年が上がるほどその行動範囲や行動内容も多様化してくる。だから、学校の場だけに教師の指導はとどまるものではない。しかし、いずれの場合においても、実際の指導に当たっては、指導に当たる教師の一致した見解（指導ライン）が必要となる。この時その指導ラインがどのようなものであれ、その根幹には「人類の進化」という視点をふまえて指導していく必要があるだろう。なぜなら、この視点に基づいて指導を行えば、その方向性については間違えることはないからである。

この「人類の進化」という視点はいうまでもなく「道徳性」に関わるものである。あわせて「道徳性」の基礎体力とでも言うべき「心の鍛錬」も必要となってくるだろう。これは具体的には「我慢すること」「逆境を乗り越える強さをもつこと」などであり、「やさしさ」や「思いやり」などにもつながってくるものである。

筆者を取り巻く現状を考えたとき、道徳教育という具体的な側面から人類の進化に貢献していくことが可能なのである。

3. 自他共に幸せとなるためのコミュニケーションの創造

ここまでは人類の進化のための道徳教育の重要性ならびに具体的方策について考えてみたのであるが、その基盤として必要なのは豊かなコミュニケーションである。

このコミュニケーションは、基本的には自分の意志や考えなどを相手に伝え、または受け止めたりする行為である。そのことによって最終的には相互理解をめざすものとなる。これはいわゆる「分かり合えた」や「共感しあえた」という状況である。

ところで、コミュニケーションの目的が相互理解にあるとはいえ、その初期段階としては、コミュニケーションにより他者の存在が自分の学びにとって有効であったという感覚

をもつことが大切である。なぜならそのような有用感をもたない限りは、他者とコミュニケーションをするための前提となる「意欲」が生じてこないからである。

その次の段階は、自分の存在が、他者の学びにとっても有効であったという受容感を得ることである。つまり、自分だけでなく、相手にとってもコミュニケーションすることが、双方の学びにとって有効であるとの認識を得ることが大切なのである。そしてその行き着く先は、「双方の幸せを目指したコミュニケーション」となる。そして、このことこそ、人類共通の仕事なのである。

ヌイの言う「終局的究極目的論」にしたがえば「すべての人間のあいだに新しいきずなを、つまり個人的な偏見はもとより、国家的な偏見さえない深遠で普遍的な連帯を作り上げる」⁶ことにつながっていくのである。そのためにも、自分の利益のためだけではなく、自他共に幸せを目指すための手段としてのコミュニケーションを世界的な規模で広げていく必要がある。

「人類の進化のために」という大見得を切らなくとも、「自他共に幸せになるためにはどうしたらよいか」「自分の言動は、自他共に幸せになるためのものであるのか」という視点を常に自問自答しながらコミュニケーションすることが、人類の進化に直接、間接に貢献することになるのである。

4. 「融合文化」の果たす役割

さて、道徳性を高めるための手段の一つとして、コミュニケーションのありかたについて述べてきた。さらにここでもう一つ「融合文化」について触れる必要もあるだろう。

「融合文化」は、二つ以上の文化を調和もしくは融合させて新たな文化を創造すること、またはその結果できた文化であると捉えている。そしてそれは、人類の進化に貢献するための「道徳性(もしくは、精神性)」を高めるためのものでなければならない。したがって、むやみやたらと文化をつなぎ合わせて見るだけでは片手落ちなのである。

私たちは、すぐ身近に融合文化の例をみることができる。たとえば「英語能」である。

ここで筆者の「英語能」体験を通して融合文化について考えてみることにする。

筆者は今年度の日本大学大学院の夏季スクーリングにおいて「能」の謡いと舞というものを初体験した。さらに、軽井沢におけるゼミ合宿においても、リハーサル公演のための練習に地謡として参加した。舞の動きは決して激しいものではない。しかし、その中に秘

めるパワーというものは尋常ではない。謡いでは背筋をまっすぐに伸ばし、腹から声を出している自分に気づいた。

さらに不思議な体験は続く。それは、英語でセリフが書かれてあり、その意味すらまとも把握していないはずなのに、そして、能舞台についてもセリフ同様ほとんど内容を把握していないはずなのに、次の箇所を謡った時、思わず目頭が熱くなったのである。

To be or not to be: is *no longer* the question.

これは、「ハムレット」が悟りを開いた時のセリフ⁷であり、この謡曲の作者である上田邦義のオリジナルなのであるが、そのハムレットの仕舞と相俟って感動は大変なものであった。

おそらくこの時、一瞬ではあったが筆者の精神はどこか高いところに昇華されたのだろう。この不思議な体験は同時に「融合文化」のパワーを筆者に強く感じさせるのである。

筆者にとって、そして人間にとって、真の「生きがい」とは人類の進化に貢献することであると断言することができる。人類が進化するためには、何より人類全体の道德性を高めることに全力で寄与する必要がある。教育と言う手段で、これから先、筆者はこれに貢献していくことになるだろう。と同時に、「融合文化」の視点に立ち、未来に希望をもたせるような、そして道德性をも高めるような新たな文化のジャンルを構築していくという決意も必要である。

人間の進化は私たち一人一人の内的向上、つまり道德性の高まりにむけての努力にかかっているといえる。そしてそれが地球的規模で広がれば、争いごともなくなくなるはずである。最後にヌイはこう述べている。

神の火花は人間に、自己の内部にのみ存在する。それを軽蔑するのも消し去るのも、あるいは逆に、神とともに働き、神のために努めたいという熱意を示すことによって神へ接近するのも、すべてわれわれ自身が選びとることなのだ。⁸

人間の今後の「運命」は、すべて私たち一人一人の意志にかかっているのだといえるだろう。そのために、私たちの精神性（道德性）を高めていこう、私たちがその文化の情報発信基地としての使命を果たしていく必要があるのだ。

そこで次に、そのためのキーワードとなる「融合文化」についてもう少し考えてみることにする。

5. 「融合文化」の認定基準

前述したように、「融合文化」を考えるに当たっては、むやみやたらと文化をつなぎ合わせて見るだけでは片手落ちである。そこで何らかの認定基準が必要となるわけだが、筆者は現在のところ次の3点を考えている。

道徳性を高めるものになっているか
新たなパワーを秘めているか
調和・融合しているものになっているか

以下、これら3点について論述していくことにする。

(1) 道徳性を高めるものになっているか

ここでは「融合文化」となり得るための認定基準として、それが「道徳性を高めるものになっているか」という点について述べる。あわせて、それが文化とどのようなかわりを持っているのかという点についても触れることにする。

ところでどうして道徳性の向上を「融合文化」に関してもクローズアップするのか、という疑問を抱くかもしれない。これは、融合文化論が「全人類共存のため」の「世界文化」の創造を目指すものであり、さらに言うならば「人類の進化」を目指しているからである。そのためには、人間と動物とを隔てる大きな差異である「道徳性」を高めることが必要なのである。

「文化」と「進化」とのかかわりについてヌイは次のように述べている。

文化という無用なものの出現によって この無用なという言葉は「生命の維持や防衛に絶対的に必要というわけのものでもない」という意味だが 人類の全史を通じてもっとも重要な日付が刻まれた。文化のあらわれは、進化への方向、すなわち動物から遠ざかる方向へと進む人間精神の歩みを証明している。この無用な原始的行為こそが、実際には、抽象的な観念や精神的観念、神についての純粋な恐怖から開放された

観念、道德、哲学、そして科学の萌芽をもたらしてくれる重要な行為なのである。⁹

「文化」と「進化」そして「道德性」「精神性」についてのかかわりがこれにより明らかになったのではないだろうか。では、その道德性や精神性というのは、現在どのような状況なのだろうか。このことから見ていくことにする。

本来一つであったはずの心（精神）と物質が、現在かけ離れており、その統合を図っていく必要があるからである。文化史の発達段階説を唱えた伊東俊太郎は、これからのあるべき姿として次のように述べている。

いまや「精神革命」の時代をもう一度思いおこしてそれがと「科学革命」の成果と真の意味で統合されなければならない時代である（中略）「精神文化」と「物質文明」との、「心」と「物」とのあるべき調和を実現することが本来の人間だろうと思う。人間とはそもそもこの二つが一体のものなのだ。¹⁰

本来は人間生活をより豊かに、より自由にするための「手段」としての「科学技術」であり、その結果生み出された「物質」であったはずである。

それが「目的」となってしまったところに、現代社会のさまざまなひずみが生じる結果となってしまったと考えられる。それを打開するために必要なことは、人間としての尊厳を回復することであり、精神と物質との調和のとれた生活を世界的規模で求めていくということになるだろう。

そのために、科学技術に象徴される西洋文化と、精神的文化に象徴される東洋の調和、融合という視点を大切にしたい。吉沢五郎との対談における、伊東の次の発言が印象的である。

この西洋と東洋との結合、地球時代に東洋と西洋がそういう意味で握手して、どのように全体的人間を回復するか、それが地球時代の人間革命ということになると思うんです。¹¹

また、同様のことをレッドフィールドもその著『聖なる予言』の中で述べている。

写本によれば、西洋は、人生は進歩であり、より高いものへの進化であると言っている点では正しいと、語っています。しかし、東洋の哲学も、私たちがエゴの支配を捨てなければならないと強調している点では、正しいのです。理論だけでは、進歩できません。私たちは意識を拡大し、神との内なるつながりを達成しなければなりません。そうやって初めて、自分の中の高次な部分によって、より高いものへと、導かれるようになります。¹²

いずれにせよ、道徳的、精神的なつながりを大切にしていくことが私たち人間の進化、進歩に貢献することになるのである。

さて、話が東洋（文化）にまで及んだので、ここで日本の文化について言及している文献にも触れておきたい。

「国際理解」と言ったときに、「英語が話せること」「外国の文化を理解すること」とのみ解する傾向があり、これに対して、筆者は「国際理解とは、何よりも自国の文化や歴史を理解することである」と主張してきた。しかし、そう言っていた自分が、実は自国の文化や歴史についてはほとんど何も理解していなかったことを自覚せざるを得なかったのが、インモースの『変わらざる民族 演劇・東と西』に触れたときであった。特に、彼の「能」についての指摘は非常に印象的であった。

能は、長い歴史をもつ日本の伝統芸能の中のひとつであるが、台本の文学的内容、形式の完成度、世界体験の深さという点で疑いなくもっとも重要なジャンルである。そればかりか、能に日本人のこころがもっとも崇高にあらわれていると私は主張してはばからない。¹³

先に「英語能」体験について記述したが、筆者が不思議な力を得、そして大いに感動したのは「能」のもつこのような特徴があったからかもしれない。

インモースの日本文化における指摘は能にとどまらずさまざまな分野にまで及ぶが、次のような記述が印象的である。

今日の世界において日本がきわめてユニークな文化をもっているのは、多種多様な要素を融合同化させた結果である。(中略)それらの部分を有機的に結合する仕方、か

つそれらを社会において機能させる方法に、われわれが「典型的日本的」と呼ぶものがある。¹⁴

この「典型的日本的」の背景にあるのが「日本人の創造的誤解」¹⁵である。この「創造的誤解」という表現は非常に的を射た表現であるように思われる。おそらくは、西洋文化とは一線を画す文化をもつ国であったにもかかわらず、その文化に適応させるための方略であったことや、日本が海で囲まれた島国であったことも影響しているのかもしれない。しかし、それにより日本文化は上述のように「多種多様な要素を融合同化させた」ユニークな文化を有することになったのだろう。そしてこのユニークな文化をもつ日本だからこそ、まずは私たちが、その特異性や「融合同化」させるための手法などを自覚していくこと、そして世界に発信していく必要があるのだ。

(2) 新たなパワーを秘めているか

「融合文化論」を論ずるにあたり、第二の観点として「新たなパワーを秘めているか」という点を挙げたい。

それは、既存の考えや方法などに刺激を与え、それを増幅させたり、または新たなものを生み出したりするものとなっているか、ということである。ただ単に奇抜なだけではそのパワーは一時的なもので終わってしまう恐れがある。その背後に確固たる理論付け、もしくは「思い」や「願い」を持っていることが重要なのである。

例えばシェイクスピア能について、宗片邦義は次のようなことを述べている。

シェイクスピアはこの世の劇で、能はあの世に関わるものであると申しましたが、拙いながらも私のシェイクスピア能は、いわばこの「死と向きあった生を生きるための悟りの芸術でありたい」とねがっておりものであります。死後のためではなく、現在、この時を生きるための¹⁶

これは、シェイクスピア劇と能の共通点や相違点などを踏まえたものであり、それぞれについて深い造詣があったからこそ到達することのできたものなのである。西洋文化の最高峰の一つであるシェイクスピア劇と、日本文化の精神性を深く追求し、総合芸術にまで高めた能のコラボレーションという斬新なこの結び付きに対して、まずは驚きを感じるこ

とだろう。しかしながら、今まで体験したことのない「感動」と「興奮」に包まれ、聴衆は新たな創造性を生み出すことのパワーを感じるだろう。同時に、自らのもつ既存の考えなどについても刺激を与えられ、パワーを生み出すもとなる融合文化に対して感化されることだろう。

このほかにも、東方学の先覚としてのF・リュッケルトがG・マーラーなど、多くの作曲家の創作に強い影響を与えたことなども挙げられる。

先のインモースの指摘の中に、リュッケルトが「東洋と西洋の精神的宝庫をたくわえて、東と西の総合をめざすあの未来の世界文化の先駆者」¹⁷ というのがある。もちろんマーラーはこのことを知る由もない。しかし、西洋と東洋の架け橋となったリュッケルトの存在が、その死生観も含め東洋へのあこがれという形で後期ロマン派の作曲家マーラーにも影響を与えたことは、先のインモースの指摘が決して誇張でないことを証明することになるだろう。あわせて、多くの作曲家の中において、新たな創造性を生み出すことのパワーを与えたという点において、リュッケルトの試みは融合文化(的)なものであったと言えるのである。

(3) 調和・融合しているものになっているか

調和・融合したものになっているか、という点について考えてみたい。そもそも「融合文化」と銘打っていること、またその方向性が「世界の文化の調和と融合」を目指しているのだから「調和」もしくは「融合」とは何か、そしてその両者の違いについて答えられなくてはなるまい。

『広辞苑』¹⁸によれば、「調和」とは「うまくつり合い、全体がととのっていること。いくつかのものが矛盾なく互いにほどよいこと」とある。「融合」については「とけて一つになること。とかして一つにすること。…合体に同じ」とある。つまり、単純な足し算ではなく、また、奇抜さや新奇性のみを求めるものでもない。それぞれのよいところを生かしつつ、新たなものの創造していくものということになるのである。

そこには前述したような「道徳性を高めるもの」であり、「パワーを与えるもの」である必要がある、さらには、結び付けたもの、もしくは結び付けようとするものに対する「思想」が必要である。加えてそれぞれのよさを引き出すものでなければならぬ。また、出来上がったものはさらなる世界の文化の発展、人類の進化に貢献するものでなければならぬのである。

6. ために代えて～「融合文化論」として飛躍するための可能性について～

以上、「道德性」をキーワードとしながら、「人類の進化」や「世界平和」のために「道德性」を向上させることの手だてを考えること、そしてその一つの有効な手だてとして考えられる融合文化についての有効性やその認定基準を考察してみた。

ここでは、さらにこれらの考察を通して融合文化論としてさらなる飛躍を遂げるための今後の可能性を考えていくことにする。

まず最初に考えるべきことは、融合文化の可能性として、どのような文化を結びつけていくかということである。従来までの研究を概観したところ、その多くは共時態の観点から見た異なる文化を結びつけたものである。これはわかりやすさ、結びつけやすさという観点から考えると至極当然のことである。しかし一方で、ある一つの文化の過去と現在を結びつけたような通時態の観点から見たものも可能性として考えられるだろう。

もちろんそれらを安易に結びつけてしまえば、古典復古や「不易流行」という言葉をより明確にただけのもの、あるいは奇をてらった一時的なものとしかたらえられないだろう。前述したような認定基準をふまえながら考えていく必要がある。(そういった意味からいえば、「英語能」特に「シェイクスピア能」と言うのは、共時態と通時態の二つの時間軸をもつ極めて重要な融合文化であることが認められるのである。)

もう一つの可能性としては、他の学問領域との融合である。これは「融合文化」そのものを一つの文化とみなし、それが世界中の人々にとって、あるいは人類の歴史にとってどのような価値(影響)があるのかということについて、何らかの手法を用いて検証していくものである。これについては融合文化研究そのものの歴史が浅いこともあり、困難性が伴うものであり、また、どんな手法を用いるのがよいのかについては提言の域には達していないのであるが、そういった観点をもふまえて他の学問領域との融合を考えていくことは「融合文化論」のさらなる飛躍のためには必要となるであろう。

《註》

- 1 『融合文化研究』第3号 国際融合文化学会、2004年
- 2 正高信男『ケータイを持ったサル「人間らしさ」の崩壊』中央公論新社、2003年 「はじめに」 頁
正高はこの著書のあとがきに次のような文章を残している。

今世紀中ごろには日本人の思考やコミュニケーションはもっともっとサル的になっているのではないかと予想している。(中略) 生物としての人間に戻るならば、内言語などはさほど必要でないのかもしれない。多様な視覚的なイメージが脳裏にフラッシュして、それにもとづいて行動決定がなされることだって可能だろう。(184頁)
- 3 ルコント・デュ・ヌイ『人間の運命』三笠書房、1994年 265頁
この本が名著である所以は、熟読すればするほどさまざまな発見を読者に与えてくれる点にある。哲学や宗教、そして科学が別物でないことを実感できる。
- 4 文部省「中学校学習指導要領(平成10年12月)」より 「第1章 総則」
ほぼ10年に一度の割合で改訂されている。「生きる力」がキーワードになっている。なお今年度、若干の改訂がなされた。
- 5 3と同じ 288頁
- 6 同上 311頁
- 7 *HAMLET in NOH STYLE* by Kuniyoshi UEDA 国際融合文化学会(ISHCC)発行台本 9頁
これは『英語能 ハムレット』と邦訳され2004年8月に軽井沢公演で使用されたテキストである。
- 8 3と同じ 360頁
- 9 同上 177頁
- 10 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会、1985年 18~19頁
- 11 同上 246頁
- 12 ジェームズ・レッドフィールド『聖なる予言』角川文庫、1994年 226頁
- 13 T・インモース『変わらざる民族 演劇・東と西』南窓社、1972年 168頁
- 14 同上 22~23頁
- 15 同上 23頁
- 16 宗片邦義『日英二ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』勉誠社、1998年 13頁
- 17 13と同じ 27頁
- 18 新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店、1998年

《参考文献》

- W.シェイクスピア 『ハムレット』(福田恆在 訳) 新潮文庫 1967年
D.ゴールマン 『EQ こころの知能指数』(土屋京子 訳) 講談社 1998年
N.ウォルツシュ 『神との対話 』(吉田利子 訳) サンマーク出版 2002年
長木誠司 『グスタフ・マラー全作品解説事典』 立風書房、1994年